

■ 編集だより

編集後記

著者は、1年前の2019年2月に東京都小平市にある国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所から高知大学医学部に異動し、同年4月から高知県の寄附により高知大学医学部に開設された寄附講座 児童青年期精神医学を担当しております。この寄附講座は、自治体の寄附により開設された児童精神医学に関する寄附講座としてはわが国6番目になります。新しい地域で若手の精神科医や研修医たちを指導する機会が増え大きなやりがいを感じる一方で、人口減少・少子高齢化が進む県内において子育て世代のニーズに応えるための責任の重さを切実に感じる機会も多くあります。

精神科医療、特に児童精神科医療は、多職種による地域連携の果たす役割が大きく、地域特性に大きく影響されることは、よく知られるところです。そして、それぞれの地域のもつ特性は、その地域で実際に仕事をしないと実感としては理解できないところが多くあります。児童精神科医療は、成人の精神科医療に比べ、家族や教育・福祉との連携を必要とされる機会が多いため、臨床だけでなく研究を行う場合も時間とマンパワーを要します。そのため、医療経済的に採算が合わず児童精神医学に関する講座が大学に設立されるのは、児童精神科医が大量に地域からいなくなるなど地域住民にとって危機的な事態が発生してからとなる場合が多い状況が続いております。地域の医療を長く支えていくための人材育成において各地域の大学の講座が果たす役割は大きいのですが、児童精神医学の講座の設立はなかなか進みません。地域の次世代を担う子どもたちの健全な育成のためにも、このような講座の設立は必須で、他の地域でも同様の寄附講座が今後設立されることを期待いたします。そのためには、児童精神医学領域の臨床および研究に関して、地域の一般住民にとっても理解しやすい業績を積み重ね、講座設立の機運を高めていく必要があります。

本号では、児童精神科医療（小児精神医療）や司法精神医療の領域に関する論文を中心に掲載しております。これらの領域のニーズは今後増加すると考えられておりますが、現状では研修を行える地域が限られております。そのため、本学会では各領域に関する委員会が主催して年に数回全国各地で研修会を開催しております。これらの研修会は、かなり好評を得ており、学会専門医をすでに取得された先生方の中にもリピーターの方が多くいらっしゃる聞いておりますので、まだ受講されたことのない会員の先生方は是非受講していただくと幸いです。また、これらの領域で臨床を担う先生方の中には、日常の多忙な臨床業務に追われ、研究に関わる機会が少なく、論文作成の経験が乏しいため、貴重な臨床経験を情報発信することを躊躇されていらっしゃる方もいるかもしれません。わが国の精神科医にむけた本誌の情報発信力は大きく、年々増加し2019年には1万8千人を超える会員が、オンラインを通して簡便に論文にアクセスできるようになっています。また、掲載1年後にはオープンアクセス化される論文もあります。査読の際には、論文作成に不慣れな先生からの投稿であってもテーマが重要であれば、全国から参集した編集委員が十分に時間をかけて丁寧に査読し掲載に結び付けております。症例報告などさまざまな形式の論文を受け付けておりますので、論文作成に不慣れな先生方でも貴重な臨床経験を是非投稿していただき、小児精神医療や司法精神医療を含めわが国の精神医療の発展に貢献していただけることを期待いたします。

高橋秀俊